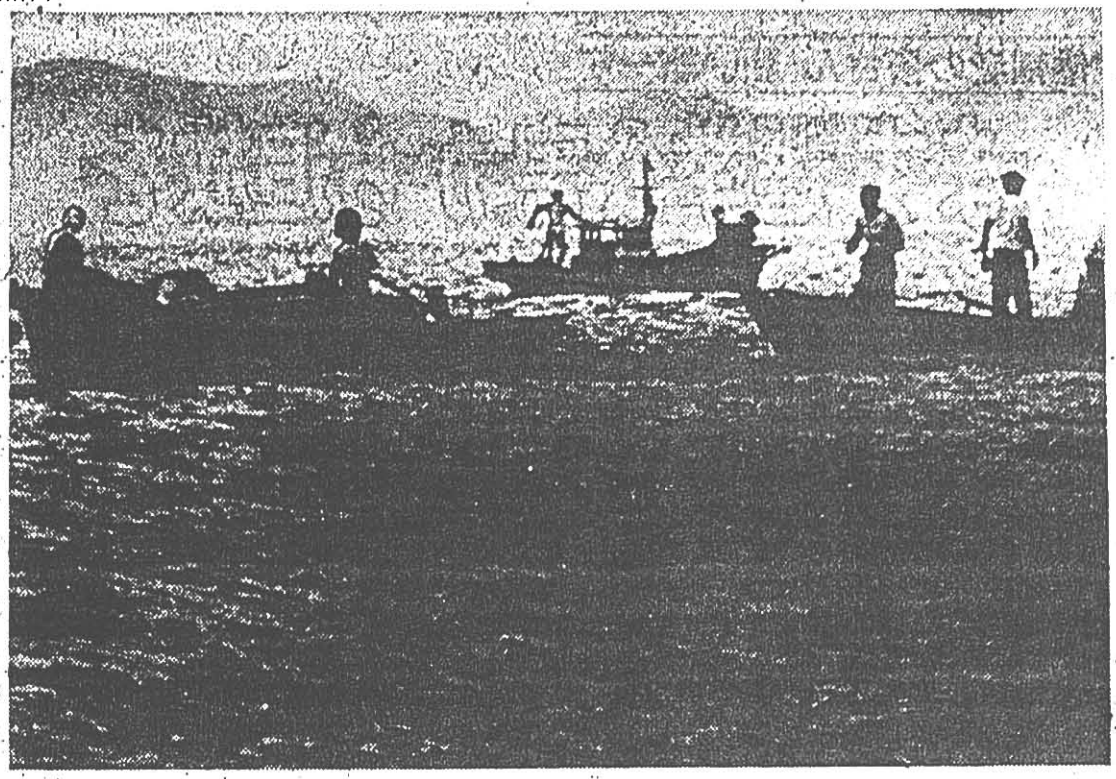
熊日1971.04.17



映画『水俣』に寄せて

石牟礼 道子

「ぼくはねえ、ほんとうに、神(たき)にうたれるおもいでいるのですよ」

土本かんとくはそのようにおっしゃるのです。ご自分がつくった映画のなかの、クライマックスシーンとなった株主総会の、白表を着た人々の肺腑(ふ)から絞り出された宗教的な音声というより外ない声のことだけをおっしゃっているわけではなく、生死のあわいを突きぬけて生きている人びとの、存在そのものにむけておっしゃっているのでしょう。

神にうたれる、などということばは、まきれもなく宗教的初心なのでしょう。

たとえば、パルチザン前史、などという映画を撮(と)っても、人間そのものを深くすくいとってきてみせる監督さんですから、このひとの胸の底にある悲願のごときものは、たとえば、ミケランジェロが描く「最後の審判」に出てくるような、人間でもあり、神でもある人々の大群像を映像化したいのではあるまいか、と思うのです。

それは人にもちろんみせたいが、なにより自分たちが、神と人との一体化した人間をみたいからではあるまいか、いや、みる、というより、自分がそのような人間に逝(ゆ)くいうるドラマの中に、一瞬でもいい、生きたいのではあるまいか、そう、わたくしは思うのです。

でなければ、一見土方風なひげづらをしていてこの映画を作った土本一家の、カメラマンも、音声さんも、みんなみんなあんまり度はずれてういういしく、はにかみつばなしであったはずがないのです。

「映像の可能性を、ぼくはやっぱり信じるのですよ」

かねがね、土本監督はそのようにおっしゃ。

活動屋さん、というものは、よほどに特別東京風の、シャナリシャナリとした気味悪い人種かと、最初わたくしは思っていました。

昨年五月、水俣病補償処理委員会の出す「処理案」の、あまりの非人道性に悲憤やるかたなく、わたくしども「告発する会」が、生活と、存在をかけてはじめて上京し、厚生省にとれ交渉し、無力な自分たちの肉体そのもので阻止しようとしたことがありました。

今様神風連風に、背すじをとのえていた潔癖な抗議者たちの中で、なにやら場違いでドスがきいて、どこやら優きょうさえある、ひときわ存在感を感じさせる紳士がまきれこんでいました。

その人物は黒めがねをかけ、なりゆきいかん、と交渉所のビルの窓を見上げているわたくしどもに、窓から身を乗り出して手を振り、まことにうらからに逝き通る声で、

「ホーイ、ただいまぁ、報告しますぁ。われわれ十三人の抗議団の代表は、たったいまぁ補償処理委員会の会場にい、万雄を排して入室しましたぁ。ただいまからぁ、みなさんを代表し、抗議文を読むところですーっ」

そのことばは、緊迫している場が闘争ビル街の谷間に、少年の種気を思わせてひびき渡り、新聞を見てかけつけたという名も知らない東京市民をふくめた抗議団は、声もないどよめきをあげました。

非情そのものの場が闘争ビルの谷間、あるいは海辺はこの時確かに、一瞬の敬虔を聞いたのです。土本さんのその声は、ヴェラホンテ歌う「ダニー・ボーイ」をわたくしに思い起こさせました。

雷がまた、この谷間に、轟もらないうちに、帰ってこい、と歌う若黒人の姿を、目の前に出現した五月の日ざしの中の機動隊の姿にダブらせて、わたくしはうっとりしていました。

そのようなことがあって、相模湖のほとりで、映画「水俣」が撮られることが前提されましたが、わたくしはこのプロダクションのプロデューサー高木陸太郎さんが、朝日弁丸出しでケンカするのに笑いころげたりしたものです。

彼の音声と、彼の芸術的資質には、かなりの隔絶度があることを、その後わたくしは発見しました。

彼は、映画「水俣」の中に、十六世紀の作者不詳の、教会音楽(聖歌曲)を採用したのです。この曲と、「赤城の子守り唄」と、ご詠歌の、絶妙のコントラストによって、彼の映画の中には、日本の、まだ発見されざる「生民」が、重厚で、無限に豊れやかな世界に存在しています。

「ねえ、水俣というところは、発光しているんだな。水俣の人間というのは、発光体なんだよ。おれ、たまらないよ、おれはまだなんにも、終わらない!。はじまったばかりです」

と土本さんはいうわごとをいいます。

芸術というのは、予言でなければならぬ、と、たぶん彼はいいたいのでしょう。

めまいがするような水俣の、春と夏のあいだの、もう一つの季節に、彼らは、またはにかみながら「ゆきたい!」といいます。

(作家)

神と人の一体化

生死の間を突きぬけて

写真は水俣の海=映画「水俣」から

きょう十七日から映画「水俣」は朝日市のグランド劇場で上映される。